新米委員の思い

公益委員　采女　博文

労働委員会の委員を拝命してちょうど１年になる。毎月の労働相談会の報告･検討、労働問題研究会、各種研修会などを通して学んでいる最中である。率直にいうと、先任の委員や事務局に助けられながら、やっとこさ仕事をしている。

日本社会は、高度成長期を経て、いくつかのバブル期とその崩壊を経験し、今、成熟期にあるのだろう。でも、昔より暮らしやすくなったのだろうか。

最近、昭和３０年代後半の農村風景を思い出す。母方の祖父母の家は国分平野の海近くの農家だった。昔の鹿児島は男尊女卑の社会だったとよく言われる。ほんとうだろうか。「制度」がどうであれ、働く女性の地位は「現実」にはけっこう高かったのではないだろうか。確かに、村の寄り合い、葬祭などは男どもが延々と飲み明かす。焼酎、煮物の準備をする女性は大変だった。表面は男社会ではある。

それは、そうと、焼酎をいつからガラスのコップでがぶ飲みするようになったのだろう。かつての農村では、黒じょか、とっくり、ちょこ、で時間はゆっくりと流れていた。だいやめ、と称する晩酌もがぶ飲みではなかった。たぶん。一升瓶は大事にされていた。ぜいたく品だった。

でも、日常は違う。夫婦で田んぼや畑、山にいく。妻はまだ日が高いうちに家に戻る。かまどの火を起こし、風呂の準備をする。「労働時間」から「家事労働の時間」の部分は少し差し引かれていた。今、共働きで子育てをするとなると、８時間労働では長すぎる。労働時間の短縮のために知恵を絞れるだろうか。

日が落ちて夫が野良から戻ると風呂に一番に入る。男社会の象徴とされる「男の一番風呂」などありがたくはない。五右衛門風呂の一番風呂はごめんである。孫の特権だった二番目でも、いたい。いたいと騒ぐ孫のために水をうべすぎた祖父は、後から入る祖母たちのために薪をくべてたっけ。

「男子厨房に入らず」（『孟子』の言葉の誤解から出ているらしい）なども、村の生活には無縁だ。ハレの日の鶏料理なども下ごしらえは祖父の役割だった。井戸端に孫がいると、肉の量が減ると怒られた。チャボは屋根まで飛んだっけ。

祖父が祖母に威張っている姿を見たことがない。『三丁目の夕日（夕焼けの詩）』（西岸良平）には、昭和３０年代の町の暮らしが描かれているが、働く女性の地位は高い。昔の農村も、男女の労働の均衡はなんとか保たれていたように思う。小さな子は職場に同伴だ。おんぶか、あぜ道の竹かごの中だった。今日、竹かごに代わる保育環境を整えることは政治の仕事だろう。冬の夜、満天の星を見る。

過去はいつも美しい。自給自足の世界をかすかに記憶している。でも、現金収入は収穫の時だけだ。男女共に重労働で、働きずくめだった。まともな医療も受けられなかった。腰も曲がり、寿命も短かった。冬は、しもやけとあかぎれ。田植えの時期の田んぼにはヒルがいて、血を吸う。